

精神医学的な自己認識の形成過程に関する考察

—「うつ」患者のメディア接触経験の分析から—

埼玉大学 佐藤雅浩

1 目的

本報告の目的は、精神医療に受診経験のある人々が、各種メディアからどのような医学的・心理学的情報を得て自らの問題を意味づけているのかを明らかにし、精神疾患の流行という現象の背景にある社会的要因の一端を明らかにすることである。1990年代の後半以降、日本では「うつ」に代表される気分障害患者数の増加が指摘されており、その趨勢は現在でも衰えていない。こうした現状に対し、これまでその要因としては、精神科臨床における操作的診断の導入や、新世代の抗うつ薬の普及、製薬企業による疾患啓発広告の影響、精神科クリニックの増加等が指摘されてきたが、これらの研究では、実際に精神科を受診する人々が、どのような経緯で、どのような情報をもとに自らの状態を精神医学的な疾患として位置づけていくのかというミクロな経緯が明らかにされていない。また他方で、近年では精神医療を利用したことのある人々を対象とした各種の社会学的研究も蓄積されつつあるが、そうした研究においても、人々が受診の前後においてどのような情報媒体に接し、そのことが自らの経験をどのように水路づけていくのかという課題については詳細な検討がなされてこなかった。そこで本報告では、「うつ」で通入院経験のある人々を対象とした調査の結果から、人々が自らの心身不調を精神医学的な病理として認識する過程について、メディアとの接触という観点から考察し、精神疾患を抱える人々が増加する社会的な要因について考察する。

2 方法

報告者が2015年に実施した調査票調査（N=500）、ならびに対面で実施したインタビュー調査（N=10）によって得られたデータをもとに、「うつ」で通入院経験のある人々が、どのようなタイミングで、どのような媒体から、いかなる医学情報に接しているのか、またその経験が自らの心身状態の定義や実践にどのような影響を与えているのかを考察した。

3 結果

その結果、第一に、回答者の多く（特に女性）が医師から「うつ」の診断を受ける以前から、自らの状態を精神医学的な疾患ではないかと考えており、そのきっかけとなったのは、周囲の人からの示唆や書籍、テレビ番組、企業の情報サイト等の閲覧であった。また第二に、彼らは診断を受けた後も、各種のメディアから自らの症状に関する情報を積極的に収集しており、そこで得た情報をもとに、自らの意識や行動を変化させていることが分かった（心身状態の客観視、生活習慣の見直し、無理をしない生活の模索等）。

4 結論

以上の知見から、現代社会における大衆的な精神疾患に関する情報は、心身の不調を感じる人々によって積極的に受容されており、そのことが精神医学的に理解される自己イメージの構築と、特定の精神疾患を患うと自認する人々の増加に結びついている可能性が示された。

文献

櫛原克哉, 2015, 「精神医療技術を通じた自己形成に関する社会学的研究」『社会学評論』65(4): 574-91.
佐藤雅浩, 2013, 『精神疾患言説の歴史社会学』新曜社。